

A Study of The Poetry about Confucian Classics by Zheng Daozhao : Unriddling the Unreadable Chinese Characters from the Ancient Whole Page Rubbing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 裕之 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/208

鄭道昭・論經書詩考

— 旧拓整本による不明字解明の試み —

A Study of The Poetry about Confucian Classics by Zheng Daozhao

— Unriddling the Unreadable Chinese Characters from the Ancient Whole Page Rubbing —

廣 瀬 裕 之*

HIROSE Hiroyuki

はじめに

平成二十七年九月、中国山東省萊州市の雲峰山に刻された鄭道昭の摩崖刻石を鑑賞するため、私は、辻元大雲先生を团长とする雲の会訪中団のメンバーとして再訪した。北魏時代に活躍した鄭道昭の摩崖書の代表作のひとつ論經書詩は、ここに存在する。私が、かつて師の種谷扇舟先生と雲峯山を訪れた頃は、論經書詩が刻された巨岩は雲峯山中腹の樹林の中で自然と一体化し摩崖特有の情趣を醸していた。ところが、それから約三十年の年月を過ぎた今日では、雲峯山の風景も大きく変わり、極彩色の二層の屋根付きの立派な碑亭が作られ、以前訪れた時と比べると、原石前面の土や底部の少し張り出した岩が取り除かれ、跋文の刻もよく見えるようになっていた。論經書詩本文が刻された当時、行が地面に対して垂直に刻された

すると、その後、今日までに起こった地震の影響で原石刻面は、写真1・2をもとに測定すると十五度左に傾き、八度ほど前傾している。そこで原石が更に動き倒れないように原石左右の側面をコンクリート等で固めて補強し保護されていた。そして、この碑亭の第一層入口の鍵は普段かけられ、参観者は二層部分にある別な入口から入り、少し遠目に刻面が見られるよう工夫された構造になっていた。原石の刻面保護のため、調査や管理者同行の見学の時のみ一層の鍵を開け、刻面を間近に見られるような構造にしたようである。かつての雲峯山の登頂は、道無き道を案内の方と一緒に登ったが、今回は、遊歩道と階段が雲峯山全体に整備され、各摩崖刻石の位置と順路を示す案内板も設置され、山全体が博物館内ようになっていた。ところで、北魏の永平四年（五一一年）に刻されたという論經書詩本文は、五言古詩四十八句からできているが、摩滅した箇所が多



▲2 論經書詩 原石 側面 (2015年)

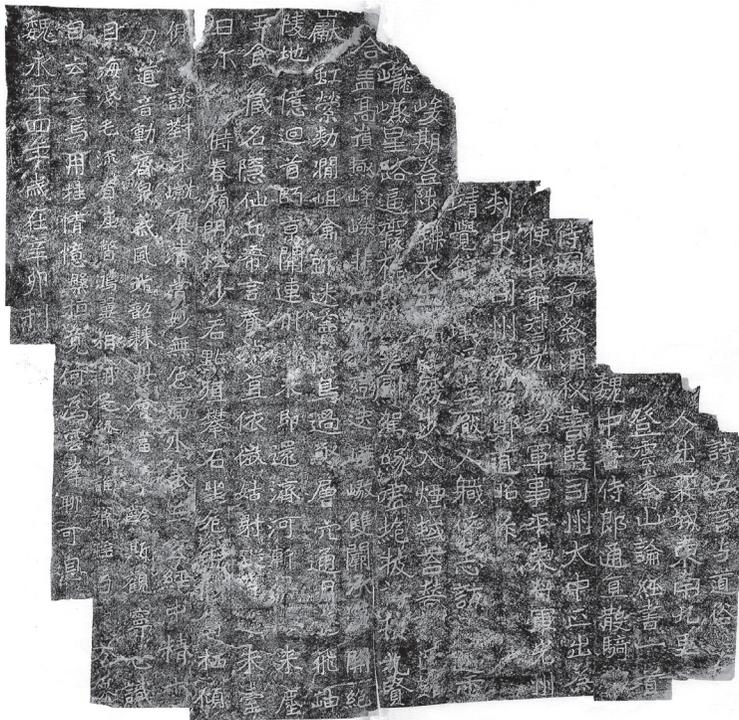


▲1 論經書詩 原石 正面 (2015年)

く、字画がはつきりとしなればかりか、摩耗が著しく解読できない文字も多い。内容は、雲峯山を神仙の棲む深山幽谷になぞらえて詠む箇所が多いが、不明字が多いため一層意味が判りにくく難解となっている。そこで、なんとか不明な箇所を一字でも解明できないものか試みたのが本稿である。

本稿を執筆するのに先立ち、平成二十七年十一月一日から次年の二月二十八日まで東京都港区虎ノ門五丁目にある書壇院ギャラリーにおいて同ギャラリー第百回記念展「鄭道昭展」が開催され、ここには、天柱山・雲峯山・太基山の鄭道昭摩崖の旧拓本の整本や剪装本だけでなく、近年新たに雲峯山から出土した摩崖刻石の拓本も展示された。また、潘存臨と吉田苞竹臨の肉筆の「鄭文公下碑」も陳列された。中でも特に光彩を放っていたのが、書壇院創設者吉田苞竹によって、大正十年ごろに蒐集されたという「雲峯山全套」の旧拓本の数々である。これらの旧拓は、とても有名で貴重なものである。その実物を目の当たりにすることができた。その中のひとつとして論經書詩の見事な旧拓整本が壁面展示されていた。この拓本の大きさは、高さ324cm、横幅359cmととても大きい。整本の拓本は、折りたたまれた状態で保管され、鑑賞するときは、通常、床の上に布などを敷いて、その上に傷まないよう慎重にゆっくり開いて鑑賞するのが一般的である。そのため、この鑑賞方法では、拓本が大きければ大きいほどその全体の姿を眺めようとしても、床上では斜めの角度からしか見ることができないという難点がある。しかし同展では、大変大きいため全体を四つに分割し表装された整本を、鑑賞するのに理想的な壁面陳列されていた。少し離ればはつきりと拓本全体が真正面から一望でき、近づけば一字ずつや部分も

◀ 3 論經書詩旧拓・整本 書壇院蔵



よく観察できるまさに鑑賞研究するのに最高の状況であった。また、長期にわたる展覧のため何回も鑑賞に行くことが出き、私にとって天からの恵みのような展覧会であった。

不明字の研究には、どうしてもできるだけ古い旧拓の精査が必要である。特にこの研究には旧拓でかつ整本の精査が不可欠であるため、本研究のため主催者の公益財団法人書壇院理事長柳澤朱篁先生にご協力をお願いするとご快諾くださり、比較検討するための拓片の撮影をご許可くださった。ここに改めて深く感謝申し上げる次第である。

本文冒頭

詩五言輿道俗□	行數
人出萊城東南九里	1
登雲峯山論經書一首	2
魏中書侍郎通直散騎□	3
侍國子祭酒秘書監司州大中正出為	4
使持節督光州諸軍事平東將軍光州	5
刺史司州熒陽鄭道昭作	6
	7

右が、巨岩に刻された論經書詩冒頭部分の七行である。岩の形に合わせて右のように刻されている。訓読すると次のようになる。漢字の右側に●を小さく付した箇所については、今まで不明字とされた右の□の箇所を可能性も含めて今回示せたものである。その詳細については後述したい。

詩五言。道俗十人と萊城を出で東南九里の雲峰山に登り、經書を論ず。一首。

魏中書侍郎・通直散騎常侍・國子祭酒・秘書監・司州太中正・出為・使持節督光州諸軍事・平東將軍・光州刺史・司州熒陽・鄭道昭作

雲峯山に刻されてから約千五百年の歳月を経過しているため、風化による刻面の摩滅がある。摩滅による不明字の箇所を□とした。文中の「道俗□人」は、ここに人数を表す漢数字が一字入ると思われる。しかし旧拓を見ても原刻をみてもこの箇所は摩滅度が高く不詳である。ところが光緒十九年（一八九三）刊行の『三續掖縣志』卷之四訂譌の中に「論經書詩」の釈文があり、そこに「道俗十人」と記されていることが判明した。この書物は、今から一二三年前、雲峯山のある萊州市の前身掖県がその行政機関として編纂した公式記録である。この箇所が光緒年間にはまだ欠損していなかったのか今では不詳であるが、清時代の学識経験者が当時の原刻又は更に古い拓を過眼して記したのであろう記録として注目し、ここではこの説を引用しておくこととする。鄭道昭が道教関係者と俗人（一般人）と、萊城つまり現在の萊州市の市街地から東南の方向九里（約四・五キロ）の位置にある雲峯山に登り、經書を論じた漢詩を一首作ったのであった。

經書とは、今日では、一般的に古聖人が述作した儒教の書のことをさすが、『論衡・正説』によると「聖人は經に作り、賢者の著述は書と曰ふ」と記されている。ここでいう經書とは、聖人と賢者の書籍の意と考える。小川環樹氏は「經書というけれど、『老子』や『莊子』の書であると思われる」としている^{〔注〕}。

「萊城」の城とは、城壁に囲まれた街のことで、昔の中国の都市は、市街地全体を外敵から守るために城壁で覆っていたことによる。萊城とは萊州の市街地という意味となる。

次の四行目からは、北魏の鄭道昭の官銜（かんが中国では官職を奏聞するとき新旧の官職名を列記した）が記されている。第二番目の「通直散騎□侍」は五字目が摩滅しているが、当時の官制の記録から「常」であることが判っている。「光州」は、山東省掖県・現在の萊州市の旧名である。「司州」は、北魏時代の都であった洛陽とその周辺数郡の地域をさす地方名である。洛陽は西周時代に都として建設され洛邑（らくい）とよばれ、漢時代に改称し、北魏・晋・隋・後梁・後唐などでは首都となった都市である。「熒陽」は、司州を構成する郡のひとつである。

①魏中書侍郎：魏の中書省の副官。中書省は、詔命の起草を管掌、また、政治の枢要にも参画、皇帝の発する命令の内容を決める権限によって尚書を始め他の政治機関を統制した。

②通直散騎常侍：皇帝の侍従

③國子祭酒：國子監（最高学府）の長官

④秘書監：主要業務は経籍の管理など宮中における図書一般の管理である。秘書省は秘書監（宮中図書館長）を置いた。

⑤司州大中正：州出身の人物を才能や德行などによって評定することを主任務とした役職。

⑥使持節督光州諸軍事：皇帝から軍政権を渡された官。光州の軍の権限をつかさどる官職。

⑦平東將軍：補佐的役割の將軍。

⑧光州刺史：光州の州の長官（知事）



▲6 原石上部にある摩崖特有の岩の亀裂と段差
写真ではかなりの段差があることが判るが、拓本では平面となり高低差が判りにくい。



◀4 正面下から仰ぎ見る



◀5 6の拓本（部分）

以上の役職のあと「司州熒陽・鄭道昭作」というように出身地と姓名を記している。「魏書」卷五十六には「熒陽開封の人」と記されている。開封は現在の河南省開封市である。

本文・漢詩文

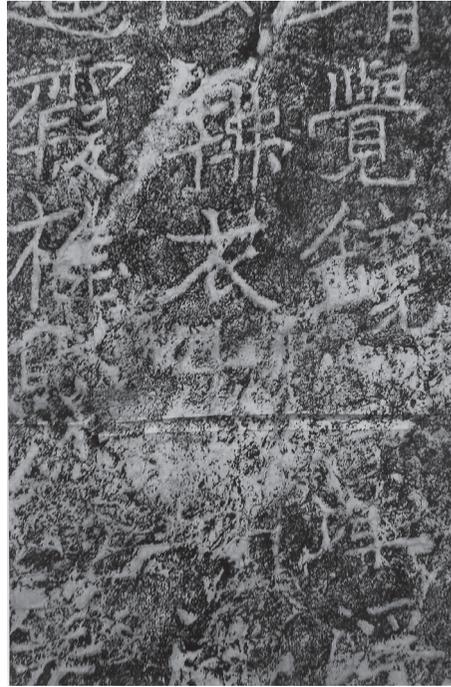
摩崖刻の八行目から始まる「論經書詩」本文の漢詩文五言古詩全文（四十八句）を岩に刻された通りに次に記した。□や漢字の右側に附した小番号（1～30）の文字は、摩滅による不明字または、文字の摩滅具合により、研究者によって解字に異なるものである。便宜上、詩文の区切れに「・」を付した。

峻期登陟・拂衣出□ ⁶ ・緩步入煙域・苔替□ ⁸ 逕難	靖覺鏡□ ¹ 津・浮生慰人職・聳志訪□ ⁴ 遊 ⁵ ・雲
巖從星路逼・霞旌□ ⁹ □ ¹⁰ □ ¹¹ ・鳳駕綠虛絕・披□ ¹² 接九賢	
合蓋高墳極・崢嶸非一□ ¹⁴ ・林巒迭峽嶽・雙闕承漢開・絶	
巖虹縈勅・潤咀禽跡迷・竇狹鳥過亟・層穴通月□ ¹⁶ ・飛岫	
陵地億・廻首眇京關 ¹⁷ ・連川□ ¹⁸ □ ¹⁹ 未即・還濟河漸□ ²⁰ ・來塵	
玉食・藏名隱仙丘・希言養神直・依微姑射蹤 ²³ ・□ ²⁴ □ ²⁵ 朱臺	
日・爾時春嶺明・松沙若點殖・攀石坐危□ ²⁶ ・□ ²⁷ □ ²⁸ 栖傾	
側・談對洙巖寶・清賞妙無色・圖外表三玄・經中精十	
力・道音動齊泉・義風光韶棘・此會當千齡 ²⁹ ・斯觀寧心識	
目海淺毛流・看崖瞥鴻翼・相翔足終身・誰辦瑤與□ ³⁰ ・萬象	
自云云・焉用挂情憶・槃桓竟何為・雲峯聊可息	
魏永平四年歲在辛卯刊。	

行数



▲8 聳志



▲7 8・9・10行目の不明字部分の拓本

まず、右の小番号1から30の漢字について、旧拓を参照しつつ先達の解字や説を加え、ここに考証を加えていきたい。

【8行目】

①「津」²は、旧拓でも1は摩滅し不明である。2は摩滅しているが、「津」が定説となっている。ところがこの旧拓を熟視すると（写真7）隣の貫く縦画が一直線ではなく上部で「ずれ」がある事、それに傍の上部が、「𠂔」のように見え、その下部が「丰」にもみえることから「澤」の異体字「湲」〔正始元年（五〇四）山公寺碑頌〕、「湲」〔興和二年（五四〇）の程榮造像記〕にも近似していることが判った。しかし確証が得られないためここでは定説の「津」を採ることとする。

②聳³は、「従」とする研究者（藤原楚水）もいる。詩の意味的には、「従志」とすると「志に従い」と読め、「聳志」とすると「志を聳^{そだ}て」となる。聳には「そびえる」の他に「高い」「欲する」の意がある。左右の行の文字との大きさのバランスや「従」の下部に「耳」字の残像らしき縦二本の筆画が細線となって過眼できる（写真8）ので、「聳」説を採る。□⁴遊⁵の4はこの旧拓でも摩滅し不詳だが、『書道芸術』P 86掲載の旧拓によると□⁶のように左上部に「コ」の刻跡がみえる。これより「改・引」などが考えられるが、文意から検討するといずれも合わず今のところ特定できない。5は、「しんにょう」ははっきりとしているが、上部の摩滅が激しい。「遊」説を採る。

【9行目】

③出□⁶□⁷は、6を州と見る説（中田勇次郎『書道芸術』）がある。もし「州」ならば、鄭道昭の書は、縦画の収筆部を左に屈曲させ

◀ 9 15行目の「若」



◀ 10 10行目の□¹¹



◀ 11 論經書詩3行目の「論」



◀ 12

写真11に示した「論」の筆画の角度と、とてもよく似ている。上の文字の二画目のななめにおける画にみえる線は原石の剥落による損傷の跡で刻線ではない。



る習慣があるが、旧拓をみてもその片鱗が見られない。ところが私が過眼すると6は「朝」の下部の筆画らしい刻跡（写真7中央下部）が見える。7は、皆不詳としているが、旧拓には「さんずい」らしき筆画が見える。私は文意から7は2と同意又は近いものと考えるので「朝津」と推定する。『三續掖縣志』では、ここを「朝廷」と記し両字の右下に「疑」の文字が小さく記されている。6を「朝」と見るのは管見と一致する。もし7を「廷」と仮定するとその異体字の「廷」が「しんじょう」の形に変化しているの左部が「さんずい」の字形と多少似てくる。「朝廷を出て」でも「朝津（朝、船つき場）を出て」でも意味は通るが「朝廷」ではないかと考レクトすぎの感があるため、詩情がある「朝津」ではないかと考える。

④替□⁸の7は、旧拓でも摩滅し不詳である。

【10行目】

⑤旌□⁹の「旌」は疑問を呈す説（『書道芸術』）もあるが、旌の異体字には「示すへん」のものもある。

9・10は旧拓でもかなり摩滅し不詳とする本が多いが、9については、左上部に「日」、下部にレンガらしき点がわずかに見える（写真7の三行目）ことから「照」とする説（焦徳森・陳安寧・雲峰刻石注釈（八種）『雲峯刻石研究・二』所収）がある。ここではこれに従い「照」を採る。10は不詳。

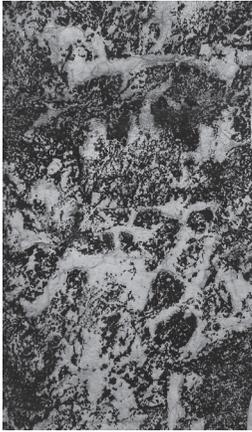
⑥□¹¹は（写真10）、不詳とする説が多い中で「左」及び「老」とする説がある。私が旧拓を見て、過眼できる筆画の断片から推定される漢字は、「羌」「若」「老」「差」であった。しかし「羌」の異体字「羌」の字形に全体が近似しているが、右下部の字形に難が

ある。上部は「若」の字形の部分と似ているが右下部分が口ではないので異なる。この刻の上部に横画が二本過眼でき、右下部分が「ヒ」に近似し、また周囲の文字の大きさととの配字のバランスから「左」だと少し小さすぎ、上部のもう一本の横画が説明できない。以上のことから、私は「老」または「差」が有力と考える。

・「虚絶」を「虚絶」と記す説（藤原楚水）もあるが、ここでは原刻の「絶」に従う。

⑦披□の摩滅度の高い漢字12は、多くの本で「衿」（えり・襟）と解字している。「披衿」は熟語として存在し意味的にも申し分ないと考えられてきた。ところが、今回の旧拓観察の結果、「論」という可能性が出てきた。よく観察して気付いたことだが、写真12の上の文字の拓影中でわずかに残る筆画の方向が、冒頭三行目にある「論」（写真11）の一・二画目と、八・九画目の点画の方向が全く同じと比べていいほど極めて相似していることが判明したからである。ここでは12は「論」とすることとする。

⑧接九賢の12は、「接」説が多いが「按」（松井如流）とみる説もある。刻を見る限り「接」に近く、意味的にも「接」字を探りたい。



◀ 13 一巖



◀ 14 登太基山詩の「巖」

【11行目】

⑨一□の14は摩滅度が高く、どの本も不明字扱いられている。しかし今回旧拓のその場所を凝視し、そこに残された筆画の断片を観察した結果、「嶺」と「巖」が候補に挙げられることが判り、更に検討を加えると「巖」という結論に至った。上部に「山かんむり」、左下部に「見」令のような刻跡が見られるが、その傍部分が、「反」のようにみえ符合しない。そこでこの箇所をよく観察すると長い横画の下に「牧づくり」が記されていることが判った。また、山かんむりの下にわずかに余白がありここに△形のムが二つはいることが想定される。そこでこれらを総合すると「山かんむり+二つのム+がんだれ+敢」で、「巖」が妥当であるという結果に至った。つまり私は「巖」であると考える。この字形は、「登太基山詩」の中にもあるので参照されたい。

とここで先に述べた中国の焦徳森・陳安寧「雲峰刻石注釈（八種）」に、14が、「岩」と記されていることが判った。「岩」は、「巖」字の簡体字としても用いられるので同意見と考える。

【12行目】

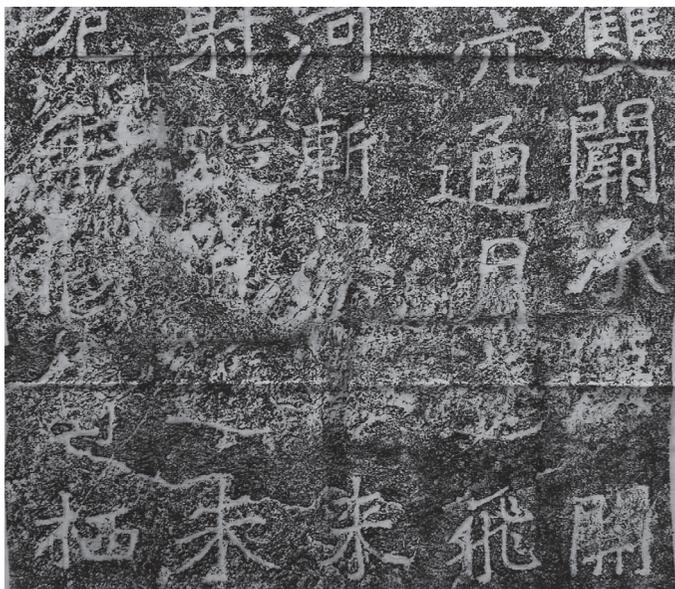
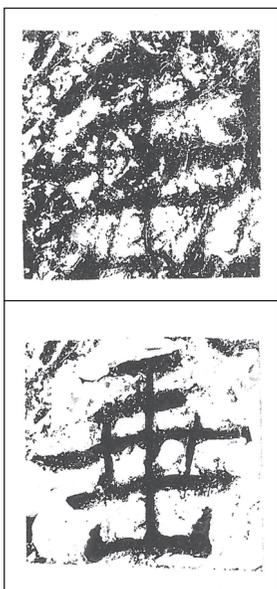
⑩竇狭の15は、旧拓では刻線がわずかに見えるのでこれで正しい。
⑪月□の16は、旧拓に「しんにょう」は見えるが、その中央部分は摩滅している。「雲峰刻石注釈（八種）」では、「遂」としている。

【13行目】

⑫京關のは、「關（門のはしらのますがた）」とも「關」の異体字にも見える。

⑬連川□の18は、「川」の最終画である三画目縦画下部を右に屈曲させし字形にした今日では珍しい字形だが、この例は、北魏の墓

◀ 16 ネガポジ反転と筆画復元



▲ 15 11行目～15行目下部の不明字の箇所

誌銘中に散見する「川」の異体字であることが判った。摩崖特有の石面の凹凸を避けたためとも考えられるが、その上の文字「連」より文字の中心をかなり右にずらして書かれている。

19は、この旧拓を過眼するとわずかに残る刻跡の線より「眇」のような痕跡が見える。

⑭河漸□の20は、不詳とするものが大部分だが、旧拓を過眼すると「梁」のような痕跡が見える。

⑮□来の21は不詳。

【14行目】

⑯養神の22は、旧拓に「神」字の筆痕が残る。

⑰姑射蹤の23は、旧拓に隣の「從」の筆画は見え、足へんは痕跡がわずかに残る。「踪」説もあるが『中華大字典』によると「踪は、蹤に同じ。玉篇に見ゆ」とある。

⑱□□は、大部分が不詳としているが、旧拓のこの部分をよく過眼すると、磨滅した刻面からわずかながら24に「肖」の筆画と「しんにょう」の上部の痕跡が見え、25には「しんにょう」の筆画がはっきりと見える。そこで「逍遙」説が浮かんできた。「雲峰刻石注釈（八種）」を拝見すると同書も「逍遙」としていることが判り、『三續掖縣志』でも同様であるため「逍遙」とみてまず間違いないと考える。

【15行目】

⑳攀石坐危□は、「石に攀り、危□に坐す。」と読め、意味から考えると□には、場所等を表す漢字一字が入ると考える。「危□」を和訳すると「危険な□」または「高い□」となる。刻の痕跡から26は「集・垂」にも見える。そこでネガポジ反転による考証を試

みた。写真16の上段がまさしく拓本の写真を白黒反転させたものである。よく見ると「垂」の字の方が近似していることが判る。そこで必要な画以外を消して復元を試みたものが下段である。北魏時代の「垂」字は同時代の墓誌銘等碑刻の字例を調査すると、最終画が「一」ではなく「山」の形となっている字例が多いため、このように推定した。「垂」には「ほとり・はて・端」の意があり、「高く危険な端にすわり」と訳せよう。

②② □□ ②⑦・②⑧ともほとりなどの本は不詳としているが②⑧は、「鳥」の下部らしき筆画の痕跡が見られる。今回の旧拓から②⑦は、「飛」の一部らしき痕跡がみえるが摩泐に伴う傷かもしれない。「飛鳥」の可能性ありとだけ記しておく。

【17行目】

②③ ②⑨ 千齡の29は、上部が摩泐していて字画が不明瞭である。しかし「千」とする説が大部分だが、「雲峰刻石注釈（八種）」は、「十」としている。ここでは通説に従った。

②④ 誰辦瑤與□の30は、不詳である。

考証後の詩文

最初三十あった異説や不明字の類等のうち、全く判らなかつたもの（□）を六つまで減らすことができた。考証の上、見えてきた詩文が、次のものである。

- 1 靖覺鏡 □津
- 2 浮生 懸人職
- 3 聳志訪 □遊
- 4 雲峻期登陟

靖覺 □津を鏡し
浮生 人職を懸ふ。
志を聳て □して遊ばんと訪ね、
雲峻きも登陟を期す。

- 5 拂衣出朝津
- 6 緩步入煙域
- 7 苔替 □逕難
- 8 龍從星路逼
- 9 霞旌照 □「老」差
- 10 鳳駕縁虚絶
- 11 披論接九賢
- 12 合蓋高擯極
- 13 崢嶸非一巖
- 14 林鬢迭曉嶽
- 15 雙闕承漢開
- 16 絶嶽虹縈勅
- 17 澗岨禽跡迷
- 18 竇狹鳥過亟
- 19 層穴通月遂
- 20 飛岫陵地億
- 21 廻首眎京闕
- 22 連川眇未即
- 23 還濟河漸梁
- 24 □來塵玉食
- 25 藏名隱仙丘
- 26 希言養神直
- 27 依微姑射蹤
- 28 逍遙朱臺日
- 29 爾時春嶺明

衣を拂ひて朝津を出で、
緩歩して煙域に入る。
苔替えて□逕難く、
龍從として星路に逼り
霞旌、□「老」差を照らし、
鳳駕、虚絶に縁る。
論を披きて九賢に接し、
合蓋たる高擯を極む。
崢嶸として一巖に非ず。
林鬢として迭に曉嶽。
雙闕 漢を承けて開け、
絶嶽 虹は勅に縈たり。
澗岨にして禽跡迷ひ、
竇狹くして鳥過ぐることを亟し。
層穴 月遂を通し、
飛岫 地億かなるを凌ぐ。
首を廻らし京闕を眎し、
連川眇たり未だ即かず。
還濟る、河漸梁
□來塵玉食。
名を藏して仙丘に隠れ、
希言 神直を養ふ。
依微たり、姑射の蹤。
逍遙す、朱臺の日。
爾の時春嶺明かに

30 松沙若點殖

31 攀石坐危垂²⁶

32 飛鳥栖傾側²⁷²⁸

33 談對洙鹹賓

34 清賞妙無色

35 圖外表三玄

36 經中精十力

37 道音動齊泉

38 義風光韶棘

39 此會當千齡²⁹

40 斯觀寧心識

41 目海淺毛流

42 看崖瞥鴻翼

43 相翔足終身

44 誰辦瑤與□³⁰

45 万象自云云

46 焉用挂情憶

47 槃桓竟何爲

48 雲峯聊可息

魏永平四年歲在辛卯刊

まとめ

本研究は、日本では通説となつている先達の研究を基とし、中国清時代の地方志『三續掖縣志』による記述と、最近の中国における研究を新たに加え、更に本年度幸運にも原刻と旧拓整本の両方を過

松沙 點殖するがごとし。

石に攀りて危垂に坐し、

飛鳥傾側に栖み、

談對す、洙鹹の賓、

清賞は妙色無し。

圖外に三玄を表はし

經中十力を精す。

道音 動くこと泉と齊しく

義風 韶棘を光らす。

此の會 當に千齡なるべし。

斯に觀る、心識の寧かなるを。

目海に淺毛流れ、

崖を見て鴻翼を瞥る。

相翔りて身を終るに足る。

誰か辦ぜん、瑤と□を。

万象自ら云云たり。

焉ぞ情憶を掛けて用いん。

槃桓竟に何を爲さん。

雲峯聊か息ふべし。

眼でき、考証を加えることができたものである。これらのことによ

り、今回、不明とされていた全部で最初、二十二字あった□の箇所

の解明に努めた結果、まだ少し疑問を残し、今後の研究を待たねば

ならぬ箇所を含むが、六字にまで減らすことができた。本研究のた

めに協力いただいた方々に深く感謝したい。

本稿は紙面の制約の関係で、ここまでとするが、次稿では、論經

書詩についてさらに本文の不明字等に検討を加え、わかりやすい口

語訳を試みるとともに、書風と書法について分析しその問題点を述

べたいと考える。

〔注1〕小川環樹「書人の伝記 南北二書人の肖像」『書道芸術』第二巻所収

より

参考文献

- ・『書跡名品叢刊 北魏・鄭道昭 論經書詩』上・下 1971年 二玄社
- ・中田勇次郎『書道芸術』第二巻 智永・鄭道昭 昭和46年11月 中央公論社
- ・書壇院ギャラリー第一〇〇回記念展（企画展示）
- ・吉田苞竹雲峯詩書碑建立十五周年記念
- ・「鄭道昭展」図録 平成27年 公益財団法人書壇院
- ・李靖・徐明・王錫平主編『雲峯刻石研究（二）』2008年11月 濟南・黄河出版社
- ・藤原楚水『註解名蹟碑帖大成』上巻 1976年6月 省心書房
- ・魏起鵬修・王續藩等纂『三續掖縣志』光緒19（1893）年
- ・廣瀨裕之「鄭道昭摩崖考I」『全国大学書道学会研究集録 平成二年度』
- ・所収 平成3年7月 全国大学書道学会
- ・毛遠明『漢魏六朝碑刻異體字典』2014年5月 中華書局
- ・坂田玄翔『鄭道昭・秘境山東の摩崖』昭和59年3月 雄山閣出版

* 武蔵野大学教職研究センター

